高津区おはなしアーカイブ

●斉藤二郎（さいとう　じろう）さん
昭和７年生まれ（８１歳）
川崎市高津区二子在住

川崎市社会福祉協議会会長
ふるさと川崎まちづくり運動副会長
五宝住宅管理有限会社代表取締役

◆ご家族について教えてください◆

私の生家は、現在の斉藤歯科がある場所（二子２丁目）です。斉藤家はもともと本郷の公家だったようです。小黒家から養子に入った私の祖父が斉藤家を継ぎました。明治初めに発令された徴兵制度では、長男は兵役免除、次男以下は兵役があったのですが、養子に入って家を継げば兵役が免除されました。小黒家の二男坊だった祖父が夫婦養子で斉藤家に入り、今の斉藤歯科のところで居を構えたのです。私と両親は、昭和２８年、私の兄が結婚したあとに、一緒にその家を出て二子１丁目に移り住みました。

祖父が生まれた小黒家は、もともと甲斐の武田家に仕えていた武家。山梨県の諏訪から落ちてきてこちらにたどり着いたという説や、鶴見の方から落ちてきたという説があります。どちらかはよく解らないのですが、落ち武者で、農家に転職したようです。

小黒家から斉藤家に養子に入った祖父、斉藤彦太郎がなかなかの商売人で、まだ煙草が民営だったころ、きざみ煙草を製造していました。相当の人数の職人を使ってやっていたようです。毎年大晦日は、朝暗いうちから家を出て、千葉の成田山まで初詣に行き、御百度を踏んだそうです。今でも成田山には祖父が寄進した石碑が残っています。初詣の帰路は、神奈川県の秦野まで回り、煙草の葉を買い付けて帰ってきました。夏に収穫できるものを先払いで買い取っていたそうです。買い取るお金はかなりの額でしたが、諏訪に裕福な親戚がいて「おまえならいくらでも貸してやる」と信頼され、そこからお金を融通してもらって商売をしていました。明治時代はこの辺りには銀行がなくて、日本銀行と取引していたそうです。明治初期から手形小切手を使っていたというのですから、相当商才に長けていたのでしょうね。

父親は男の兄弟が３人、女の姉妹が３人。私の親父が長男でしたが「おまえは家を継ぐのだから、そんなに勉強する必要はない。とにかく家のことを一生懸命やれ」と、いわれたそうです。祖父はその当時から能力別主義、能力別教育。女の子も女学校まで行かせました。「教育は人を作る」という主義で、斉藤家はとにかく教養を身につけなさい。財産は使ってしまえばそれで無くなってしまうけれど、個々に身につけたものは消えないということで。祖父のそういう考えが父親にも受け継がれていたのでしょう、能力別に教育を受けさせてくれました。

私には姉が４人おりますが、一番上の姉は実践女学校に通っていました。まだ二子橋ができる前でしたから船で多摩川を渡り、あとは玉電（玉川電気鉄道）で二子玉川から渋谷まで通い、２番目の姉も実践女学校、その次は駒澤女学校、

一番下の姉が大妻専門学校を出ました。

◆小学校時代の様子はいかがでしたか？

私が小学生のころは、梨山や桃山でとれた果実を箱に詰め、リヤカーで東京の用賀や上馬、あの辺の市場まで売りに行っていました。正確にいうと中里っていうところ、上馬から三軒茶屋の間あたりです。現在、高島屋のある辺りが旧道で、くにゃくにゃ曲がっていて坂道があったのです。こちらから行くと大山街道の二子橋のたもとにおそば屋さんがあって、交番があったところの坂。その坂は梨や桃を積んだリヤカーなんか、ひとりじゃとても動かなくて、後ろから押す手伝いをしてお小遣いをもらっていました。行きはリヤカーを押して、帰りはリヤカーに乗せてもらって。あと、用賀にも坂がありました。二子玉川の坂が特に大変でした。だから子どもでも何でも後ろからリヤカーを押してもらわなきゃ登れなかったのですね。朝早く、学校へ行く前に手伝いをしていました。

桃は夏、梨は秋に収穫があり。私が子どものころは一時期ご飯食べないで、虫食いで売り物にならなくなったものとか、落ちた梨を食べさしてもらいました。小学生のころから自分で包丁を使ってむいていましたから今でも果物をむかしたら上手いものですよ(笑)。多いときは１日２０個くらい梨を食べていましたね。

梨畑では長十郎、二十世紀、それから菊水っていう三種類を栽培していました。桃は天津(てんしん)桃も作っていましたね。中国から来た品種で、頭が出ている桃で、皮をむくと実が赤く、甘酸っぱい桃でした。それも市場に出していました。

梨畑には囲いもあって、収穫期には中に番小屋もありました。夜になると梨泥棒が一本の木まるごと盗っていったりするので、私も一度番小屋で見張っていたのですが、夜真っ暗になったら怖くなって家に帰っちゃった。「そんなことじゃ駄目だ。夜盗りに来るのだから」って叱られました。子どもたちなんかは多摩川に泳ぎに行く帰り、まあ出来心でちょっと盗るのは大目に見ていたようです。

遊び場は、光明寺というお寺の境内。今の住職は幼なじみで、同級生。二人ともやんちゃで、ガキ大将でね、近所の年下の連中を集めては、石塔の上を飛んで歩いたり、本堂の下をもぐったり、通る人をおどかしたり。光明寺の境内に子どもたちみんな集まって、年上から年下まで、女の子も一緒にお医者さんごっこなんかもやりましたね。あとは、ベーゴマ、メンコ。女の子はお手玉だとかあやとりだとか。そんな遊びをしていました。

夏休みになると、祖父が伊豆の修善寺にある「魚屋旅館」に一族皆を連れて行ってくれました。当時、祖父がその旅館にお金を貸していて、利息を取らないかわりに夏に孫や身内を連れて行くからから、それはただにしてくれって。だから小学生のころは、必ず夏休みには祖父の号令一下、２０人くらいでその旅館に行き、泊まって遊んで帰ってきました。今はもうその旅館もなくなってしまいましたが、昭和３０年ころまでやっていたのかな。小学校時代の思い出です。

◆戦争中の思い出はありますか？

終戦間際の空襲、昭和２０年の春にこの辺りも空襲があり私の生家も流れてきた破片で別棟にあったお風呂場の屋根が２カ所ほど抜けました。空襲警報が鳴ると皆、家の防空壕に入りました。防空壕は皆１軒１軒作っていました、中でも生活できるようにして、サイレンが鳴れば入っていました。夜、空からアメリカの飛行機が真っ赤な焼夷弾を落とすのも見ました。真上に落とされたのは皆流されて、この辺りには落

ちては来ませんでした。軍事施設を狙っていたのでしょうね。

戦争が激しくなると高津小学校は閉鎖され、子どもたちは集団疎開か縁故疎開をすることになりました。私は４番目の姉が、生田小学校の裁縫の専科の先生をやっていた縁で、自宅から通える縁故疎開にしてもらいました。本当はいけないのですよ、でも学校は閉鎖しているから、自宅から生田まで通っていました。生田までは玉電で溝ノ口まで行って、南武鉄道で登戸まで行って、登戸からは小田急。毎日１時間くらいかけて通っていました。帰りに空襲警報が出て、電車が止まったこともありました。兄貴は、その当時もう中学校に行っておりましたから、小学校へはひとりで通っていました。

そのころ、中学生は学徒動員。兄は現在の大田区鵜の木に東京中学校（現：東京高等学校）に通っていましたが、勤労奉仕で学校の周辺、蒲田にある民家を壊しに行っていました。軍事工場だった三菱重工業の工場が鵜の木駅の一つ先、下丸子にあったので、空襲による被害から守るため、民家の取りこわし作業に生徒が動員されていました。

私は、小学５年生は生田小学校に行っておりましたが体調不良になって、生田まで通えなくなり、近くの橘小学校へ転校しました。しかし、とうとう橘小学校は１日も行けませんでした、戦争が激しくなってきましたから。橘小学校からは正式な卒業証書をもらっていないのです。そういう時代でした。

◆特に思い出に残っていることはありますか？

大山街道は昔砂利道でした。６月ころになると、夜が明けるのが早くなりますが、そうすると牛車をひいて、元石川とかね蔵敷だとか、この奥の方から東京へ「肥引き」をしていました。樽を、いくつも牛車に乗せて東京まで行くのです。そして東京で人糞をもらって帰ってくる。昔は今みたいな化学肥料がなかったから、人糞は大切な肥料でした。肥やしを牛車でとりにいっていたのは、やはり戦前ですね。戦後も、あったかもしれませんが、戦前の記憶として鮮明に私の頭に残っています。朝４時ころになるとガラゴロガラゴロ出かけていって、９時ころに帰ってくる。それは何台も連ねていきました。

戦後の農地改革（農地解放）で、農地は政府が買い上げて、小作人に売り渡されました。斉藤家の土地も平地でね、平地は１反、２反って勘定されるのですが戦後、小作人に貸していた土地の大半が強制的に買い上げられてしまいました。

牛車を引いて肥引きをしていた、元石川だとか蔵敷だとか柿生だとか、向こうの方は、山でした、山林は一丁、２丁って勘定するので桁が違うのです。だから農地解放で地所を手放すこともなく、今でも広い土地が残っています。祖先が苦労して残してくれた土地を維持している人に、「今は悠々とやっているけれど、ご先祖さんへの感謝を絶えず、心の底に残しておいた方がいいよ」って。つい余計なことをいってしまいます。

◆町の様子について教えてください

この二子の地には、職人さんが多く住んでいたようです。大工さんだとか、大工さんの下職、左官屋さんとか。私の隣にも船大工さんが住んでいて、渡しの船だとか多摩川の船を造っていました。あと下駄を作っていたところもある。

大手の工務店が台頭するころになると、地元の大工さんには仕事が回らなくなるし、大工が暇になれば、下職もまた暇になっちゃう。職人相手に商売していたお店も物が売れなくなっちゃったんでしょうね。

◆地域のことに関わるようになったのは？

地域のことをはじめたのは、民生委員になったときからですから。都の職員を辞めて四・五年たってからでした。地域の民生委員とか、町会の副会長をやりました。二足のわらじは履けないと、町会長はお断りし副会長にかわってからは福祉が専門になりました。若いうちは交通安全協会や観光協会の仕事にも携わりました。

民生委員をやるきっかけは、父親の後輩で地元町会の副会長をやっていた人が、私が都の職員を辞めたことを聞きつけて「私も昔お宅の親父さんから農業調整委員の補助員をやるようにいわれ、何が何だか解らないけど受けた。今度はあなたが民生委員をやってほしい」と。「私にできるのですか」っていったら、「いや誰だってできるから」と云われて、それではやりましょうって。それからが大変でした。

社会福祉協議会ができたのは昭和２６年。アメリカの占領下、マッカーサー司令官から号令をかけられて作ることになったようです。目的は生活困窮者や障害者など、いわゆる社会的な弱者を救う目的でした。川崎では、昭和２８年ころにできて、社会福祉法人になったのが昭和３６年だったと思います。主体となって会を構成していたのが、川崎の場合は町会長と民生委員でした。

私自身、母親が５７歳からリュウマチで寝たきりになってしまいました。昭和３０年ころです。当時は介護について情報も制度もなく、寝たきりで入れるお風呂場を母のために作ったり、事情を話して勤務先から早退させてもらったり、そういうふうにして７２歳で亡くなるまで七年年自宅で介護しました。自分の親のときはできなかったことができるようになれば、と考え、福祉関係の仕事をやってこられたと思っています。

果樹園をやめ、農業もやめ、今はその土地にマンションを建てて、管理会社を設立し、自分で管理する。戦前、土地を持っていた地主は、戦後の農地解放のときに悔しい思いをしているわけです。だからせめて残っている土地くらいは絶対に売りたくない。そういう気持ちが強いのでしょう。

以前、諏訪の小黒さんという、二子新地から他人の土地を通らないで自宅まで帰れるくらい土地を持っていた大地主に「農地解放がなかったら、今頃働かないで悠々自適に暮らせたのにね」って話をしたら、「斉藤さん、それは違う。自分のやりたいことやって、食いたいもの食っていたら寿命も短かった。こんなに長生きできたのも、農地開放されて、逆に命をもらえたのだよって、そういうふうに私は思っているんだ」って。確かにそういうことがあるかもしれないと思っています。

（平成２５年９月３０日）